

1

六本木の交差点から百メートルの位置に、そのストリップバーはあった。キャバクラや居酒屋などの入った中規模の雑居ビルの二階である。

店に入るには、エレベータと外階段の両方が使えたが、もうひとつ、従業員にしか知られていない非常口がある。非常口はトイレの横の、カーテンにおおわれたステイールの扉で、そこを開けると隣接するビルの外階段の踊り場とつながっているのだった。

店内は、三分の一近くを大きなステージが占め、天井とステージをつなぐように三本のポールが立っている。午後六時半の開店時間から午前三時の閉店時間まで、そのステージからダンサーの姿が消えることはない。

ダンサーはすべてが白人で、多くはルーマニアやブルガリアの国籍をもつ女たちだ。中にわずかにロシア国籍も混じっている。

店内をいきかうボーイは日本人だが、ウエイトレスは白人だ。そしてビルの外で、日本人には日本語で、外国人には英語で声をかける十人近い客引きのすべてが、アフリカのナイジェリア国

籍だった。

店の表向きの経営者は日本人で、指定広域暴力団のフロントだ。フロントというのは、正規の組員として登録されていないが、資金その他の面で組のバックアップをうけ、見返りにアガリを組に納めている企業舎弟だ。いわば、カタギの皮をかぶったやくざである。

暴力団対策法の施行により、暴力団に所属する者は、警察による徹底的な封じこめにあうことになった。極端な場合は自分が暴力団員である、と名乗っただけで、検挙される。事業者となるのはほぼ不可能で、飲食店などの経営が発覚すれば、潰れるまで警察のマークにあう。

そのため、表向き合法の収益事業に関しては、すべてをフロントがおこなう形になり、暴力団による事業運営の実態の把握は、かつてより困難になった。

さらにこのストリップバーには、もうひとつ特徴があった。それは、届出上の経営者は、広域暴力団山上連合やまがみのフロント、高木たかぎだが、経営に関する実権の半分を、北海道の水産加工会社の社長であるロシア人が握っていることだ。

ロシア人の名はコワリヨフ。ウラジオストクの水産会社の役員も兼ねているが、その水産会社そのものが、犯罪組織だった。コワリヨフは、バーで踊るダンサーを日本に連れてくる旅行代理店も経営している。ダンサーは、東欧各地からモルドバ共和国に集められ、そこから日本に送り込まれる。モルドバは、ウクライナとルーマニアにはさまれた小国で、ヨーロッパにおける人身売買の拠点といわれている。

店が比較的すいていることもあって、今はステージの上にいるダンサーはひとりだけだ。

大音量のロックにあわせ、トップレスにバタフライとブーツだけを着け、ポールに体をこすりつけるようにして踊っている。

白い上半身に汗が光り、挑発的に腰をグラインドさせるが、ダンサーの目は虚ろで、ステージの下に陣どる客たちをまるで無視していた。

ステージに近いテーブルにすわっているのは、ほとんどが外国人の客だ。アメリカ人やカナダ人、一部にロシア人が混じっている。日本人の客は、少し離れたテーブルから遠巻きにステージを見つめていた。

その中のひとりが立ちあがった。色の浅黒い、ずんぐりとした男だった。グレイのスーツをノーネクタイで着け、瞼まぶたが垂れた眠たげな顔をしている。テーブルの上には、ラッパろっ呑みしていたウオッカカクテルの小壺こひんがあった。

男が店に入ってから一時間が過ぎていた。その間、男は同じテーブルで酒を飲みつつづけていた。今、テーブルの上にある壺は四本目だ。

店ではチップを払うと、別室でプライベートダンスという、一対一のサービスを受けることができる。このサービスを好むのは、日本人客が多い。かぶりつきでダンスを見るのは照れるくせに、ふたりきりになりたがるのが日本人客の特徴だ。

しかしこの男はウエイトレスによるプライベートダンスの勧誘にも無言で首をふるだけだった。むつつりと酒を飲み、煙草を吸って、ステージに目を向けているだけだ。その目はだが、ダンサーと同じでひどく虚ろだった。

立ちあがった男は、ビールをラッパ呑みし歓声をあげている、兵隊らしい白人のグループをやりすぎし、店のトイレに入った。

トイレの中は無人だった。小便器の前に立ち、用を足し始めるとすぐ、スーツを着た巨漢の黒人が、その隣に立った。

男は無言で黒人を見やった。黒人はまっすぐ前を向き、男を無視していた。だが男が用を足し終わると同時に、上着の内側から拳銃を抜き、男のわき腹に押しつけた。「あなた静かにする。じゃないとわたし撃つね」抑揚のないしゃがれ声で黒人はいった。

男は一瞬、体を硬直させた。黒人はほとんど瞬きもせず、男を見つめていた。緊張しているようすはなく、紫檀のような額には汗ひとつ浮かんでいない。

「俺が誰だか、わかっちゃっているのか」

男は黒人を見返し、訊ねた。だが黒人は答えなかった。銃口をわずかに動かし、男に便器を離れるようながした。

男は黒人の手もとに目を落とした。大きく分厚い掌に、オートマチックのマカロフ拳銃が握られている。その手つきは、明らかに銃を扱い慣れた人間のものだった。人さし指は、引き金を囲むトリガーガードに添えられ、何かあれば一瞬で発砲できる位置にある。

男は体の向きをかえた。トイレの出口に向かう。ここで発砲がおきても、店内は耳を聳するサウンドで満たされている。ごく近くにいる人間の耳にしか銃声は届かないだろう。

「こつち」

トイレをでると黒人がうしろからいった。隠された非常口のわきに、革のジャケットを着た白人が立っていて、さっとカーテンをはぐり、ドアを開いた。

男は銃口に押され、非常口をくぐった。

背後でドアが閉まり、音楽が遠ざかった。逆に街の喧騒に包まれる。クラクション、バイクの排気音、嬌声。

隣接するビルの非常階段を降りたところに、エンジンをかけたバンが止まっていた。スライドドアを開け、乗客を待っている。

男と黒人は階段を降りた。押しこまれるようにして男がバンに乗ると、黒人は外からスライドドアを閉めた。あたりを見回し、助手席に乗りこむ。

バンの中には、運転手の他に、ふたりの男が後部席にいた。日本人と白人だ。

男は日本人の顔を見つめた。バンが発進し、中腰だった男はバランスをとろうとシートにつかまった。

「すわれや」

日本人がいった。男は無言で空いているシートに腰をおろした。白人が立ちあがり、通路を皆さんだ向かいのシートに移動した。手に、黒人がもっていたのと同じマカロフを握っている。銃口は床を向いていたが、人さし指はやはりトリガーガードに添えられていた。

白人は首が太く、ちぢれ毛をした小柄の男だった。ジャージを着ていて、目に濁った光がある。

焦点が定まっていないようだが、こういう目をしている者ほど、機敏で残酷な行動をとることを男は知っていた。

「何なんだ」

男はいった。わずかに声がかすれていた。

「何が」

日本人が訊ねた。

「なぜ俺をさらう」

日本人は黙っていた。やがて、わずかにおもしろがっているような口調でいった。

「なぜだと思っ」

「わからん」

男は吐きだした。

「地検は北海道に手をだすのをあきらめた。コワリヨフをやれば、政治家やら役人がぞろぞろくつついてくる。それが面倒だ」と

「じゃ、なぜあんたは『ヘルスゲート』にきた？」

日本人がいった。「ヘルスゲート」というのがストリップバーの名だった。

「酒を飲むためだ」

日本人は目をあげ、男を見た。ひどく冷たい目だった。

「ふざけるな」

淡々といった。

「嫌がらせだろうが。たとえ地検が手をひいても、お前はあきらめてないって、そう見せつけにきたのだろう。どれだけ商売の邪魔をすりゃ、気がすむんだ」

男は黙った。

「千葉に行く」

日本人がひとり言に聞こえるような口調でいった。

「ちよんどのいい産廃処理場が茂原にあるんだ。生きたまんま埋めてやるよ」

「威しだろ。そうに決まってる」

男はいった。かすれ声がさらにひどくなっていた。

「デコスケ威して、何の得がある。お前は今日限り行方不明だ。本気だ」

「デカを殺して、ただですむと思ってるのか」

男はいった。額に汗が浮かんでいた。

「すむね。お前のことは、みんなあきれてるんだよ。安いカニやホタテを売って何が悪い。父ちゃん酒の肴が増やせて、母ちゃんは大喜びだ」

「カニやホタテ以外にも、もってきてるものがあるだろう。第一、それだって密漁品だ」

「ロシア政府がオツケー一つてんだから、文句ねえだろう」

「役人もグルだ」

「じゃあ、お前だってグルになりゃよかったじゃねえか。誰が困る？ 困らねえだろ」

男は日本人を見つめた。

「俺にころべってのか」

日本人は答えなかった。

「ころばなけりゃ、殺すって、そういうことなのか、え、菅谷よ」

日本人は名を呼ばれ、一瞬、ぎくりとした顔になった。

「コワリヨフがよ、怒ってんだよ。しつけえって。なんであのデコスケは、道警でもねえのに、自分の会社をつつき回してんだって」

「本気でそんなこといってんのか。じゃ、キャビアは何だと訊いてやれ」

極上のキャビアの缶が北海道の税関をスルーし、山上連合の息のかかった商社から、都内のワインバーに流されているのを、男は知っていた。ワインバーもまた、山上連合のフロントだ。キャビアは、モルドバからきた女たちが運んできたマリファナを山上連合が日本国内でさばいた金が化けたものだ。

マリファナを売った金がキャビアに化け、一見までも高級そうなレストランやバーで洗濯されている。菅谷は山上連合の組員だった。

「ありや、趣味だ。コワリヨフはワインとキャビアが好物なんだと。お前、キャビアなんかでくたばっていいのか。もっと格好いい死に方があるんだろがよ。キャビアの密輸をつついて殺されたなんざ、洒落しやれにならねえぞ、おい」

「じゃ山上連合は、そのキャビアのためにデカを殺すのか。デカを殺やったら、組が潰れるまで追いこまれるんだぞ」

「殺るのは俺じゃねえ。明日、バンコクへ飛ぶことになってる、あいつだ」

菅谷は助手席にすわる黒人を目で示した。

「あいつは、お前の名前も商売も知らねえ。知ってたところで、どうってことはねえだろう。親兄弟、内戦で皆殺しにされてるんだ」

「ナイジェリアか」

男は低い声でいった。

「知らねえ。アフリカのどつかだろう。そんな奴はいくらでもいる。あいつらアフリカンは、俺らとはちがう。十歳かそこらでさらわれ、機関銃もたされてよ、人殺し、しこまれてんだよ。否いや応ぢ、ねえんだ。さからったらぶち殺されるか、両手の肘から先、ぶった切られるかだ。情けもへつたくれもない」

菅谷が答えると、男は息を吐いた。バンはいつのまにか首都高速に入っていた。下り車線を、タクシーに追いこされながらも、法定速度を守って走っている。

「じゃ、こいつは何だ」

男はジャージジのロシア人を目でさした。

「見張り役さ。ロシア人てのは厳しいぜ。仕事の首尾をきっちり見届けて、お前の泣きわめく声を実況中継で聞かせると、コワリヨフにいわれてるらしい。もちろんくたばるところも写メール撮ってこい、とな」

男は目を閉じた。

「ふざけやがって」

力なく吐きだした。

「河合かいはい、つったつけよ。お前も馬鹿だ。俺たち極道をつつき回してるぶんにはどうってことねえと思っただらうが。けどな、時代がかわったんだ。もうお巡りだろが何だろが、屁へでもねえんだよ。そりやそうだわな。今日、お前を殺る野郎は、二度と日本に戻っちゃこないんだ。わかるか。お前の失敗は、海の向こう側にいる奴らを怒らせたことなんだ。俺ら日本人は我慢強い。けど、ロシア人はちがうってわけさ」

「俺ひとりを殺したところでかわらんぞ」

「そりやどうだろうな」

菅谷がつぶやいた。

「今までお巡りは強すぎた。いくら極道をいたぶってもやり返されることはねえと、タ力をくくっていた。それがそうじゃないと、お前が消えたらわかるわけだ」

「組対が雪崩を打って、お前の組に襲いかかってくる」

河合は菅谷の目を見つめ、いった。菅谷は首をふった。

「なんで。お前を殺ったなんて話はどこにもねえんだ。組うちで知ってんのは、俺くらいのもの

だ。決めたのはロシア人で、殺るのはアフリカ人。どんだけ叩かれたって、何もでねえ。もちろん——」

菅谷は言葉を切って、河合の目を見返した。

「お前の仲間にはわかるだろう。お前を消したのが、ロシアだって。だが証拠がなけりゃ何もできない。残るのは、ロシアをつつくのはやばいって教訓だ。お巡りだろうと何だろうと、ロシア人のビジネスを邪魔したら、こういう目にあうって、前例さ。コワリヨフはそいつを作りたらしい。勝てない相手がいるってのを、こらできちんと教えておこうというわけだ」

「お前ら……」

つぶやき、河合は目を伏せた。

「いずれ全部、乗とられるぞ。いいのか、それで」

「馬鹿」

菅谷は乾いた笑い声をたてた。

「古いね、お前も。もう、縄張りだの何だのって話じゃねえんだよ。アタマ張ってるのがどこの誰だろうと、儲けがだせるかどうかなんだ。いちいちロシア人が、六本木くんたりまでシメにくるわけねえだろう。縄張りなんかにこだわってたら、むしろ警察に狙い打ちされる。それがわかったんで、こうやってビジネス優先に切りかえたんだ。昔みたいに、極道とお巡りが相身互いだった時代は終わったんだ。終わらせたのは、お前らのほうだ」

バンがバウンドした。高速をでて、一般道に入ったのだった。

河合は向かいにすわるロシア人を見た。熱のない視線で見返してくる。この男の目に自分は何物”としか映っていないようだ。菅谷とのやりとりにもまるで興味を示していない。

「ああ、煙草が吸いてえ」

菅谷がつぶやいた。

「まったくよ。組長が禁煙したんで、俺らも右にならえ、だ
いまいましそうにいった。」

「時代が変わったんだ」

力なく河合はいった。それきり、車内は沈黙がつづいた。

やがて菅谷が車窓から外を確認し、携帯電話を手にした。

ボタンを押し、応えた相手に告げる。

「あ、俺だ。状況は？ わかった。あと十分かそこらでつく」

電話をしまい、運転手の肩を叩いた。

「予定通りだ。俺ら降ろしたあと、エンジンはかけたまま、待ってるよ」

運転手は無言で頷いた。山上連合の組員ではなく、中国人のように見える。

まっ暗で、いきかう車もない県道を走り、さらにそこからバンは側道にそれた。舗装がとぎれ、下生えの草が車体にこすれて音をたてる。ハイビームにしたライトが、一本道の先に広がる産廃処理場の廃棄物の山を照らし出した。

「ようし、止める」

やがて菅谷がいい、バンは山の手前で止まった。菅谷がスライドドアを開けて降りたつ。

「降りろや」

河合にいった。ロシア人が銃を動かした。トリガーガードの中に指が入っている。

河合はバンを降りた。千葉ナンバーのセダンが止まって、その前に男がふたり立っていた。作

業衣のような紺のツナギを着けている。

「菅谷さん、服、服」

ひとりが訛なまりのある日本語でいった。中国人だ。

「え？ ああ、そうか。河合、服脱いで、すっぱだかになれや」

菅谷がバンのライトに目を細めながら、河合をふり返った。

「何？」

「だから、すっぱだかになれつての。殺してから脱がすの、大変だからよ」

「ふざけんな。そんなくたばりかたしてたまるか」

河合は歯をくいしばり、いった。寒気が足もとから這はいあがり、膝ひざが震えた。

菅谷はあきれたように首をふり、助手席を降りた黒人を見た。闇の中で、二台の車から浴びせられるライトだけが、その場にいる者の姿を浮かび上がらせている。

「しょうがねえな。往生際が悪いぞ」

「死にたくて死ぬ奴がいるか」

河合は吐きだした。この男たちに命乞ごいをしても無駄だとわかっていた。アフリカ人、ロシア人、中国人。日本人はたったひとりだ。絶望が全身をこわばらせ、ともすれば膝が砕けそうになる。

菅谷が黒人に手をふった。黒人がマカロフをもちあげた。指が引き金にかかる。

カシヤツという金属音がどこかでした。同時に血煙があがった。よろめいたのは、黒人の巨漢だった。瞬きをし、次の瞬間、前のめりに倒れた。

「何だ、おい——」

ロシア人が不意に顔をこわばらせた。叫び声をあげようと開いた口が歪ゆがんだ。カシヤ、カシヤツという音がつづき、ロシア人の胸からも血煙があがった。

つづいてツナギを着たふたりの中国人が声もなく転がった。

何が起こっているのか、ようやく河合にはわかった。暗闇の中から誰かが狙撃そげしているのだ。

バンのフロントグラスが砕けた。残っていた運転手が頭を撃ち抜かれ、座席から崩れ落ちるのが見えた。

最後に菅谷だった。ピシツツという音とともに額はじが弾けた。さらに胸に数発の弾丸がつき刺さり、倒れこんだ。

銃声はいっさいしなかった。聞こえたのは、金属のこすれるような音だけだ。生き残って、大地に立っているのは河合ひとりになっていた。

「クリア」

低い声が聞こえ、河合はふりかえった。黒いツナギに防弾ベストとヘルメットを着けた小柄な影が、光と闇の境目に立っていた。手にしているのは、S A Tが装備しているのと同じ、ヘッケラー&コッホのサブマシンガン、MP5のサイレンサーモデルだ。

血の匂いが濃く漂っている。同時に、その夜初めて、あたりの闇が虫の音で満たされていることに、河合は気づいた。

「あんた、誰だ」

河合は小柄な影につぶやいた。が、影は答えず、あとじさりした。闇に吞まれ、消えた。

「河合さん。河合直史警部補」

階級名を呼ばれ、河合ははっと体を硬くした。

「誰だ」

「こちらに」

闇の中に、明りが点^{とも}った。いつのまにか一台の4WDが止まっていて、ルームランプを点したのだ。

「君を傷つけはしない。そこを離れたまえ」

声はいった。いわれるまま河合は動いた。ぎくしゃくとして、まるで自分の体が、油の切れた機械のようだ。

白っぽい人影が4WDのかたわらにあつた。レインコートを着た、男だった。額が大きく後退し、それを補うように鼻の下から顎^{あご}までをヒゲでおおっている。

光の外にでて、河合はふりかえった。吐き気を覚えた。一瞬で六人が殺^{ころ}戮^つされた現場が浮かびあがっている。

口もとに手をやった。

「先に吐くかね」

コートの男がいった。河合は頷く暇もなく、地面にひざまずき、戻した。

吐いている間に体が震えだした。頭が混乱し、すべてが夢の中のできごとのように思えてくる。しかし体を包む冷気も、胃が空になってもなお喉^{のど}の奥からこみあげてくる吐き気も、すべて現実だった。涙と鼻水が止まらない。濡^ぬれた手で上着をさぐり、くしゃくしゃのハンカチで顔をぬぐった。

ようやくおさまると、立つ気力もなく、河合は地面にすわりこんだ。コートの男は無言で見おろしている。

やがて男が動いた。4WDのドアを開け、銀色のポットをとりだし、河合にいった。

「熱いコーヒーを飲むか」

河合は無言で首をふった。今何かを口にすれば、また戻してしまう。

男はポットの蓋をとり、そこに中身を注いだ。白い湯気がたち、コーヒーの香りがあたりに漂った。それをうまそうにすすった。革の手袋をしている。

「何なんだ」

ようやく、河合はいった。男は答えずコーヒーを飲んでいる。ときおり目を細めて、死体の方向を眺めた。

「バードウオッチングじゃねえんだ。何をコーヒー飲んで気どつてやがる！」

河合は叫んだ。怒りと恐怖がないまぜになった。自分でも理解できない感情がこみあげ、叫び声になっていった。

男が笑った。

「おもしろいことをいう」

「どこがおもしろい！ こんなたくさんの人間が死んでいて」

「確かに」

男は頷き、コーヒーを飲み終えた蓋を振り、水気を切るとポットに戻した。

「我々がいなければ、死者は一名ですんだ。君ひとりだ。選択はどちらか。君ひとりか、それ以外の六名か」

河合は口を閉じた。男をただ見つめた。男は無表情に河合を見返し、訊ねた。

「君ひとりのほうがよかったか」

舌がもつれた。

「お、俺を助けるために殺したのか」

男は答えなかった。河合は瞬きし、言葉を探した。

「ころ、殺さなくとも、助けられた」

男が歩みだした。ただならぬ威圧感をうけ、すわりこんだまま河合はのけぞった。男は河合の前にしゃがんだ。

「我々は専門家の集団だ。今夜のこの行動は、あらかじめ決められた計画通りに実行された。目的は君を救出すること。そしてその事実を我々と君以外の人間には知られないことだ。わかるか。彼らは秘密を守るために殺された。それは君の救出とは、また別の理由だ」

河合は黙った。男の言葉がゆっくりと浸透していく。

「我々って何だ」

「知りたいかね」

男が河合の目をのぞきこんだ。

「知りたい」

「だろうな。どのみち君は知ることになる。そしてあと戻りはできない」

河合は目を伏せた。

「公安か」

「ちがう。我々は警察ではない。強いていうなら、NGOのようなものだ」

「NGO?」

「そうだ。我々の組織は、東京の他にワシントン、パリ、バンコクに支部をもち、モスクワと上

海、ロンドンに協力機関がある。だが存在を公にすることはない」

「わけがわからん」

河合は首をふった。

「車の中で話そう。このままだと君は痔じになった上に風邪をひく」

男の目がやわらいだ。河合は勇気をふりしほって、背後の殺戮現場をふりかえった。夢ではない。死体は転がっていて、黒ずんだ血だまりが広がっている。

「ここは——」

「処理をするチームがくる。あの六名は、君のかわりに、埋められる」

君のかわり、という言葉聞いたとたん、吐き気が再びこみあげるのを河合は感じた。殺される運命であったのは、かえようなない事実だ。そしてそれを目の前の男とその仲間がひっくりかえした。

男に目を戻した。河合が口を開くより先に、男がいった。

「警察はこない。彼らは消えた。それだけだ」

「俺は……どうなる」

「それをこれから話す」

男はいつて右手をさしだした。革の手袋に腕をつかまれ、河合は立ちあがった。

2

「あなたの、その、NGOは名前を何というんだ」

4WDの車内はほっとするほどあたたかかった。気づかなかったが、運転席に男がひとりすわって、ハンドルに手をかけ、ずっと外を見つめていたのだ。河合とコートの男が後部席にすわると、4WDを発進させた。

「名前はない。我々は単に『オーガニゼーション』といっているが、それでは意味をなさないので、合言葉として通称『ブラックチェンバー』と呼んでいる」

「『ブラックチェンバー』？」

「古い言葉だから、あまり使う人間がいない。だから合言葉になる」

河合は男をみつめた。男はポットをもちあげた。河合は頷いた。

濃く苦いコーヒーが喉を伝い、胃に流れこむのを感じた。それは、生きている証^{あかし}だった。

「もうおちついたようだな」

コーヒーを飲み下す河合を見つめ、男がいった。

「私の名前は、北平^{きたへい}という。日本支部の責任者だ」

「本部はどこにある」

「ない。各支部が連携し、行動決定の責任を負う」

河合は窓の外に目を向けた。4WDは側道を抜け、県道に入っていた。ガソリンスタンドやコンビニエンスストア、ファーストフードが左右に連なっている。

「何だかよくわからん。あんたたちは何をしたいんだ」

「その質問はふたつの意味にとれる。組織に関する疑問か、君に関する疑問か」

「両方だ。なぜ俺を助けたかを訊きたい」

「その前に」

北平と名乗った男はいった。

「私を逮捕しようと考えているかね」

「わからない」

正直に河合は答えた。

「それは自分を助けたからか。それとも警察という組織の限界を感じているからか」

河合は北平を見た。

「なんでそんなことをいうんだ」

「この二カ月間の君と同僚の捜査に注目していた」

「こともなげに北平は答えた」

「どうやって」

「手段はたいして重要ではない。問題は、君の努力が、あえてここは、『君と同僚』ではなく、君の努力、というが、報われなかったという点だ」

河合はコーヒーを口に含んだ。苦みは、さほどでもなくなっていた。

「警察、あるいはそれに準じる司法機関は、国家、自治体に帰属している。その国、地域の法によって活動を保証されると同時に制約されるという宿命がある。したがって国家をまたいで活動は、その保証範囲から逸脱する。それが君の努力が報われなかった最大の理由だ。地方検察庁も同様の理由によって判断を下した。簡単にいうなら、自国内の犯罪とその実行者だけに活動対象を限定せよ、ということだ。しかし君はそれでは解決しない、と考えた。暴力団だけでなく、その向こう側にいるロシア人組織を追及すべきだ、と」

河合は無言だった。北平が警視庁や地検に何らかのコンネクションをもっているのはまちがいな

いい。そうでなければ、捜査の内容をここまで知っている筈がなかった。新聞には載っていないし、そもそも記者が知らない。

「警視庁や地検の判断は、ある意味で当然だ。隣の敷地から侵入してきたモグラが庭を荒らしたからといって、隣の芝生をめくってまで退治するべきではない。モグラが自分の庭にいるなら退治してもよいが、その一匹だけではないといって隣に押しかけていくようなものだ」

「わかっているじゃないか」

河合は吐きだした。

「モグラに法は関係ない。だが俺たちは法に縛られる」

「その通り。しかもこのモグラは、海の方から君を殺せと命じた。果たして退治できるだろうか」

「それは——」

「できるかできないかで答えたまえ」

北平の声が鋭くなった。

「できない、だろうな。命令したと立証するのは難しい上に、かりに日本の司法がそう判断しても、当のモグラはいくらでも逃げられる。こつちの庭にいないのだから」

「そうだ。モグラに、家と家の境界など関係ない。しかしモグラ退治をする人間にとっては重要だ。たとえ隣の家の人間と話し合い、退治する方向で合意に達しても、そのモグラが隣の庭に逃げたら、そこまでだ。そしてそうなったとしてもモグラは君を殺せ、という指令を発することができる。電話一本、メール一通で」

河合は身震いした。コワリヨフを逮捕するには、気の遠くなるような手続きが必要だが、自分を殺せと命じるコワリヨフに、手間はほとんどかからない。

再び似たような混成チームが派遣される。とりかえはいくらでもきく。今夜死んだ六人のうち、周囲がその生死を気にするのは菅谷ひとりだろう。菅谷は組織に所属し、おそらくは家族や友人がいる。それ以外の連中には、行方がわからなくなった、連絡がとれない、という理由で騒ぎたてる者がいない。それぞれの故国には、家族や友人がいるだろう。しかし日本での彼らは、幽霊のような存在だ。本名や家族構成を教えあっているような仲間がいるかどうかすら怪しい。稼いで逃げる、ヒットアンドアウェイのために日本にきている連中だ。

ある日こつぜんと姿を消しても、故国に帰ったのか、他の土地、国に移ったのか、あるいは死んだのか、気にする者はいない。肩をすくめ、首をふって、知らない、どこかへ行ってしまった、ですまされてしまう。

河合自身が、何人ものそうした外国人犯罪者を追ってきた。消えた外国人を捜すのは、警官が金を貸している者だけだ。

「その通りだ。その気になればコワリヨフは何度でも俺を殺せと命じられる」

「今夜死んだロシア人はたったひとりで、しかも末端の構成員に過ぎない。日本人も同じくひとり。それぞれの組織にとって被害は最小だ」

北平がいった。

「もしこれが同じ組織の六名であつたら、被害は組織の存続にかかわる。混成部隊の強みはそこにある」

河合は息を吐き、両手で顔をおおった。

「あんた、ひどく冷静だな。いつもこんなことをやっているのか」

「そうではない。もし我々が日常的に犯罪者を排除していたら、君らの仕事はもっと減っている」

「そのいいかたはやめろ。現実人間が死んでいるんだ！」

河合は声を荒らげた。

「奴らは確かに犯罪者で、消耗品だったのだろうか、それでも人間だ」

北平は沈黙した。車内は静かになった。

やがて河合は息を吐きだした。

「わかってる。あんたは俺を助けた。俺は警官で、あいつらはプロの犯罪者だ。だからといって皆殺しにしている、なんて理由にはならない。ただ、俺はそういたいだけだ」

「私も、そうは、思っていない。重要なのは、今夜、君に対しておかされた殺人未遂ではなく、それを指示した人間の動機だ。その動機をとり除くのが、『ブラックチェンバー』の目的だ。つまり、君がしようとして、結果頓挫させられた捜査だよ」

「ロシアマフィアの摘発か」

「あらゆる国際的な違法取引を監視し、その目的とするところの利益確保を阻害する」

東京、ワシントン、パリ、バンコク、といった北平の言葉がよみがえった。

「国連か」

「君がいわんとしているのは、F A T Fのことかね。G 7によって設立された、マネーロンダリングを防止するための金融活動作業部会の名だが」

「そんなようなものがあると聞いた」

「我々はN G Oだ。F A T Fとは関係がない。もちろん情報の共有はあるが」

「どこからじゃあ活動資金がでるんだ。それぞれの国がだしあっているのじゃないのか」

「我々が国家に求めるのは、情報の提供、だけだ」

河合は北平を見た。4 W Dは高速道路に入っていて、照明がくつきりと北平の横顔を浮かびあげさせている。

五十を過ぎ、六十に達する少し前、と河合は北平の年齢を読んだ。

「資金は、我々がその活動を阻害した、違法な国際取引の一部を流用する」

「ブラックマネーのピンハネか」

北平は苦笑した。

「簡単にブラックマネーというが、その総額がいったいどのくらいになるか、君には想像がつくのか。世界全体のG D Pの一割に達するのだ。どの国の国家予算をも上回る金額だよ」

河合は黙った。世界のG D Pの一割というのが、いったいどのくらいの額なのか想像もつかない。

「麻薬その他の違法薬物、武器、食品、人間、さまざまなコピーソフト、模造品、絶滅危惧種の動植物、絵画、臓器、そして金そのもの。違法取引の対象は、この世のあらゆる品物のうち、手に入れるためには金を払ってもいいと考える人間が存在するものすべてだ。生産者がいて仲介業者がいて、運送業者がいて、倉庫業者がいて物流管理者がいて、卸売業者、販売業者を経て消費者に渡る。つまりまっとうな商品と何ひとつかわりがない。ただ一点、その品物が、消費される国家においては非合法だという問題をのぞき。場合によっては、中間の業者には、自分が違法取引に加担していることを知らない者すらいる。ただ割のいい、単価の高い仕事を請けおっているのだと思いきんで——」

「思いこもうとしている奴もいる」

河合はいった。

「こんなに銭になる仕事がまっとうな筈はない、と薄々気づきながらも、食っていくために詮索をせず、知らぬふりをする。そうして運びこまれた品物が誰かに損害を与えたり、ときには死なせるような結果になったとしても、自分は関係ない、まともな人間だと信じたいんだ」

「昔はもつと単純だった。夜の埠頭で怪しげな男たちが集い、現金の詰まったアタッシュケースと引きかえに密輸品を受けとる。そこに居あわせた人間すべてが犯罪者だと自覚し、彼らを逮捕すれば、犯罪組織に打撃を与えることができた」

河合は北平を見つめた。

「あんた、警察にいたのか」

北平は答えずにいった。

「現在のように複雑化した違法取引を暴くために必要なのは、会計士やコンピュータの専門家であり、法律や投資に詳しい人間たちだ。国際的な違法取引が現金で決済されることはほとんどなく、電子商取引や地下銀行の送金でまかなわれる。金の流れがつかめなければ、犯罪に加担したのが何者なのかを炙りだすことはできない。より現実的で身近な犯罪に対応しなければならぬ警察には困難であり、努力に見合う結果が得られない作業だ。地道な捜査を何カ月もおこなったあげく、ほしが太平洋の小島ナウル共和国に本社をおく幽霊企業の経営者だ、と判明して喜ぶ刑事はいない」

「ナウル共和国？」

「オフショア（沖合）と呼ばれる、国や土地のひとつだ。ペーパーカンパニーの設立、匿名の銀行口座や金融取引を顧客に許している。同様なものは、スイスやモナコ、タイにもある。FATFの圧力で、リヒテンシュタインやバハマなどは慎重になったがね。ナウルはFATFからの要請を拒絶した。マネーロンダリングへの協力は、国家事業というわけだ」

「どうしようもないな」

河合はつぶやいた。「国家が犯罪に加担しているのであれば、別の国家の捜査がそこに届いたところで結果などできるわけがない。

「確かにどうしようもない。だからといって、国際的な違法取引を野放しにすれば、いずれまともな経済活動を撤退せざるをえない企業が生まれてくる。悪貨が良貨を駆逐するのたとえだな。コピー商品が氾濫すればオリジナルを作っている会社はたちいなくなる。『ブラックチェンバー』が必要とされる理由がわかるだろう。我々は決して、今夜のような暴力的手段で、違法取引の摘発や排除をおこなっているわけではない。ではなぜ、このような真似をしたのか。それは、君に加わってもらいたいだ」

河合は驚いて北平を見つめた。

「何だって」

「金融やコンピュータ、法律の専門家を我々は擁している。さらにいえば、暴力の専門家も。我々に今必要なのは、刑事捜査の専門家だ。むしろこれまでもそういう人間はいたのだが、欠けてしまった」

「欠けた」

河合はくり返した。

「そう、欠けた。我々の支部ひとつひとつは、巨大ではない。精鋭を揃え、情報の提供を各地の

支部や国際機関、司法組織などからうけて活動している。存在が公になることは決してあってはならず、秘密裡に調査を進め、違法取引を阻害し、報酬を得ている。そこに入ってもらいたい」

河合は息を吐いた。想像もしていなかった。

「なぜ、俺なんだ」

「警察の限界を知っている。それに独身で、情報統制が比較的容易だ。何より、捜査官として優秀だ」

河合は黙った。北平がつづけた。

「この選択は、君の身の安全にもつながる。今夜の失敗を知れば、コワリヨフは、新たな刺客をたてるだろう。警視庁にとどまったところで、コワリヨフの決意を鈍らせる材料にはならないことをわかっている筈だ」

「警察を、辞めろ、と」

「君には訓練が必要だ。さしあたっては、情報処理と語学の訓練をうけてもらわなければならぬ。警察にいたのでは、それは不可能だ」

「簡単にいうな」

「簡単ではないよ。君が優れた刑事だからこそ、うける資格がある。気力と体力ともに必要だ。だが命がかかっているとなれば、うけざるをえない」

河合は目を閉じた。再び、悪夢の中にいるような非現実感に襲われていた。殺されかけ、救われた。しかしその結果、人生が一変しようとしている。

「攻撃は最大の防禦だ。コワリヨフを相手にする以上、君は身をもってそれを知ることになる」

北平が告げた。

3

二十七の初めにスタートした河合の結婚生活は、三十になる直前で破綻した。表向きは性格の不一致だったが、実際は、妻に新たな男ができたのだ。離婚後、妻はその男と再婚した。

結婚によって独身寮をでた河合は、妻の求めで官舎ではなく、妻の実家に近いアパートに新居を定めた。離婚後も、五年そこに住んでいた。

命を救われた夜から二日後、河合は、警視庁組織犯罪対策二課を依頼退職した。退職理由は、「一身上の都合」だったが、上司や同僚は、それを「燃えつきた」からだとうけとめた。「限界にぶちあたり、燃えつきる」刑事はときおりいる。要は、組織としての警察に失望し、やる気を失ってしまうのだ。

慰留は思ったほどなかった。山上連合とコワリヨフの一件で上と激しくぶつかったことが響いていたのだ。

退職後、すぐにアパートを引き払った。退職した刑事、特に組対に属していた者の動向に、警察は神経質になる。それだけ、ミイラとりがミイラになるケースが少なくないからだ。捜査情報の漏洩を警戒し、再就職先のチェックもおこなわれるのがふつうだ。ましてや、再就職先が「未定」となっていたのでは、辞表の受理すら拒まれる。にもかかわらず、河合に対し、それはなかった。奇妙だと思ったが、好都合でもあった。

「ブラックチェンバー」の日本支部なるものがどこにあるのか、まだその時点では河合には不明だった。なぜならアパートを引き払った河合が北平の指示で向かったのは、台湾だったからだ。

台北市内で十二月の訓練をうけるためだ。中国語と英語、そしてコンピュータの扱いを学ぶのが目的だ。教師はすべて中国人だった。

初めのうちは休みがなく、体を動かすのは、週三度の拳法道場だった。河合が暮らしたのは、食事つきのホテルで、そこには同じような境遇のタイ人とカナダ人がいた。

六カ月が経過して初めて、月に二日の休日が与えられた。その日は単独での外出も許された。日本にはビザ更新のために何度かとんぼ返りをしたが、それも東京ではなく沖繩だった。わずか一時間半の飛行で沖繩には到着する。那覇市内で一泊し、翌朝には再び台北に飛んだ。

カナダ人が脱落した。彼にとつての六カ月目、ビザ更新のためにバンクーバーに飛んだが、二度と戻ってこなかった。

河合が訓練を全うできたのは、中途半端で日本に帰ればコワリヨフの刺客に狙われるという不安があったからだ。警察官であっても殺害を決心する人間にとつて、警察官でなくなったから殺す理由が消えた、という判断はない、と、三カ月一度、河合のようすを見にやってくる北平が告げたのだ。

それが真実かどうかはわからないが、警察を辞めた河合にとつて、生きのびるための最良の選択が、訓練だった。

台北にいる間、多くの日本人を見かけたが、言葉を交した者は皆無だった。日本語を話すのは、北平が來台したときだけだ。日本の情報には、ホテルの部屋にあるテレビとインターネットによって不自由はしなかった。

ただ、日本語を喋るといふ喜びだけのために、み月に一度の北平の来訪を、河合は待った。十二月が終了し、四度目の來台をした北平と、河合は台北市内のレストランで夕食をとった。

料理のオーダーは、すべて河合が中国語でおこなった。会話に関しては、不自由がなく、テレビ番組を見ているとも内容がほぼ理解できるようになっていた。

「明日、バンコクに飛んでもらう」

食事を終え、デザートを食べっていると、北平が告げた。

「バンコク？ 今度はタイ語とムエタイか」

「いや。観光旅行と思つていい。バンコクにはナイジェリア人街がある。さらにいうなら、黄金の三角地帯も近い。バンコクでは、元軍人の我々の協力者が君をアテンドする。ヘロイン中毒者の更生施設や、東欧から連れてこられた娼婦たちが、アラブ人やロシア人の客をとっている店に案内してくれるだろう。バンコクは、アジアにおける違法取引のハブといつてもよい。人身売買は男女ともに、大人子供の別なくおこなわれているし、黄金の三角地帯からは、かつてのヘロインにかわりメタンフェタミンが大量に運びこまれている。さらに中国から、コピーブランドが流入し、周辺諸国へも送られている。タイにいつてもらう理由のひとつは、そうした違法取引を牛耳っている組織のある典型が見られるからだ」

「ある典型？」

北平は中国語でウエイトレスを呼び、お茶のお代わりを命じた。その発音が自分よりはるかに優れているのを知って、河合は息を吐いた。初めて会ったあの夜から、北平にはあらゆる面で、自分より優れていると感じさせられていた。不快とまでは思わないが、情報をこだしにしか与えない、この男の存在そのものを象徴している。

決して勝てない相手。すべてをうけいれざるをえない上司。それは警察にあつた上下関係とは微妙に異なる。

警察組織において上司の命令は絶対だが、その上司にも、逆らえないさらに上の人間が存在することが前提だ。上へ上へとその関係をたどっていけば、警察庁長官というポジションに到達するが、それははるか遠くのかすみがかかった高峰で、上司という実感はない。日常とはかけ離れた存在である。

だがこの北平は、中国人の教師を除けば、「ブラックチェンバー」と自分をつなぐ唯一の人間だ。なのに、あらゆる面で、絶対的な優位を、河合に対して感じさせている。このままでは、北平個人の「使用人」になってしまうような危機感すらある。

河合のそうした感情の揺れに北平は気づいていないかのように言葉をつづけた。

「国際的な違法取引が成立するためには、政治家や官僚、司法関係者などの関与が不可欠だ。一度や二度の小規模な密輸ならともかく、取引の安全を恒常化しようと考えるなら、賄賂による担保が確実だからだ」

「あなたのいいかたは難しいな。俺は日本語からしばらく遠ざかっていたんだ」

思わず河合はいった。北平は苦笑した。

「すまない。学者のような喋りかただったな。簡単にいうなら、汚職と違法取引はカードの表と裏だ。摘発を逃れるために最も効率がよい方法は、現場に影響力をもつ人間に金を握らせることだ」

「それならわかる」

「が、国や地域によっては、逆転の現象がおこる。本来、買収され違法行為に目をつぶる立場の人間が、違法行為をとりしきるのだ。誰かに買収されるのではない。その立場にあることを利用して、利益を得る。しかもそれは組織的におこなわれる。結果、違法取引にかかわる犯罪組織は、

国や地域の公的機関と重なりあう」

「税関や警察が犯罪組織だというのか」

「資本主義、社会主義の別なく、多くの国家において最も力をもつ公的機関は軍隊だ。武力をもち、他のどんな公的機関より多数の人員を抱えている。ピラミッド型の構造は、腐敗に対してもろい。命令が絶対である以上、違法、合法を問わず、部下は上官の望む行動をとらざるをえない。しかもピラミッド構造の組織は、過失や犯罪の発生を外に知られるのを嫌う」

「タイの犯罪組織は軍隊が牛耳っている？」

「軍と警察の両方だ。それぞれ専門とする分野は異なる。勤ちがいをしてはいけないのは、だからといって軍人や警官が怠惰で無能だというわけではない。組織全体の利益に関係するだけに、新興の犯罪組織の摘発には熱心だ。むしろ、他の国の軍人や警官より優秀とすらいえる。縄張りをおかす犯罪者はただちに検挙されるか、裁判を待たない処刑がおこなわれる」

「むしろ平和だな」

河合はいった。

「その通りだ。一般市民の治安状況についていうなら、バンコクは東京などよりはるかに安全といえる。チンピラやごろつきにからまれることもなく、通り魔殺人などめつたに起こらない。その一方で、売春や違法薬物の売買は堂々とおこなわれている」

「あなたの話を聞いていると、タイの社会のほうが日本より成熟しているように聞こえる」

「ある意味ではそうだ。建前の資本主義ではない。法が、その国を司る者たちの味方だとはつきりしている。君にはそれを見てきてほしい。そして『ブラックチェンバー』が相手にするのが、そういう人間たちも含むネットワークだと知ってもらいたいのだ」

河合は北平を見つめた。

「結局、絶望するだけじゃないのか。そんなことを知ったところで」

北平は否定しなかった。

「君は犯罪がこの世から消えてなくなると思うか。あるいは組織化した犯罪集団を根絶できる日がくると思うか」

「思わないね。犯罪も犯罪組織も消える日がくるとすりゃ、それは人間が皆、ロボットのように生きていく時代だ」

河合は首をふった。

「私も同感だ。犯罪というのは、いわば欲望の直接的な充足だ。それがさまざまな法によって規制されるものだから複雑化し、地下に潜る。だからといって、規制をなくせばよいとも思わない筈だ。いつてみれば、ゴミ処理のようなものだ。ゴミを減らすことはできるがゼロにすることはできない。そして処理の仕事は誰かがやらなければならぬ」

「それだけか」

「なぜそんなことを訊く」

「たとえばこの一年の訓練で、あなたの組織は莫大な金を俺につかっている。まだ俺は何の役にも立っていないし、これから立つという保証もない。そんな費用はどこから得るのだろうかと思っ

て」

「その部分については説明済みだと思いが」

河合は息を吐き、茶のポットをとりあげた。

「儲けていないのか」

『ブラックチェンバー』が？」

頷き、北平の茶碗に注いだ。北平は無言だった。遠くを見ている。

「ブラックマネーの総額は、世界のGDPの一角に相当する、とあなたはいった。『ブラックチェンバー』が、そのうちの〇・一パーセントでも得ていたら、とんでもない金額だな」

北平はゆっくり首を回し、河合を見た。

「強欲と正義は両立すると思うかね」

「どうだろうな」

河合はつぶやいた。

「国際的な違法取引を阻害することは、法律とは別次元の正義につながる、と我々は考えている。その一方で、阻害の代価として、麻薬や武器の代金を奪うことに問題があるだろうか。それとも、そうした金は犯罪者に返すべきだ？」

河合は首をふった。押収した犯罪資金を犯罪組織に返す馬鹿はどこにもいない。犯罪組織にとって最も大きな痛手は、構成員を逮捕されることではなく、資金をおさえられることだ。だからこそ一年前、コワリヨフは自分を殺そうとした。河合が、コワリヨフの金儲けを阻み、北海道のコワリヨフの財産をおさえようとしたからだ。

「つまり、法とは別の道義的な問題だ。もちろん押収した金をより人道的な使い途にあてる、という選択もある。が、そうなれば、『ブラックチェンバー』の活動はそこで終息してしまう。喜ぶのは、違法取引をおこなっている他の犯罪集団だけだ。我々は強欲に、彼らから資金を奪う。それが正義につながるからだ」

バンコクの空港は、ガラスをふんだんに使った巨大な施設だった。河合を迎えにきた男は「ポール」だと自己紹介し、英語でこの空港は、パリのドゴール空港を真似た建物だと説明した。

「タイ人の本名は皆、とても長い。だからニックネームをつける。私のことはポールと呼んでくれ」

ポールは、五十年代後半の男だった。わずかに腹がでていて、それを隠すようにゆったりとした長袖のシャツを着けている。黒のスラックスに黒の革靴だ。

エアコンのきいた建物の外にでると、熱気が押しよせてきた。台北より気温が高く、だが湿度はそれほどでもない。

ポールはシャツの胸ポケットから煙草をとりだし、火をつけた。

「今は乾期だから、とてもすごしやすい。観光には最高のシーズンだ」

深夜だというのに、バックパッカーのようないでたちをした白人の旅行者が次々と建物から吐きだされ、バスに乗りこんでいく。

「最近、新しい観光名所が、北部のノンカイの近くにできた。昔のG Iの町だ。ベトナム戦争を戦ったアメリカ人が、年金をもらいうようになつて、タイに移住してきたんだ。『地獄の黙示録』^{アポカリプス・ナウ}という、コッポラの映画を知っているか」

やや訛のある英語で機関銃のように話す。河合は首をふった。

「そうか。ベトナム戦争は、アメリカにとって悪夢だったが、タイには大金をもたらした。アメ

リカ軍相手の商売で儲けて、ホテルやレストランのオーナーになった人間がたくさんいる。そして今になって、かつての悪夢が青春の思い出にかわった連中が、タイに集まってきた。ローリング・ストーンズとマリファナ、そして若い娘たちをもう一度楽しもうというわけだ。人間は不思議な生きものだ。地獄だと思つた戦場が、今度はなつかしい」

煙を吐き、首をふった。浅黒い顔にはまった目には、まるで表情がない。手首には金のロレックスが巻かれていた。

「あんたも軍隊にいた、と聞いている」

河合も煙草をとりだし、いった。

「陸軍にいた。八〇年代の中頃までは、アメリカ軍の特殊部隊を連れて、よくベトナムとの国境付近までいつていた。明日からお前を陸軍の訓練場に連れていく」

「訓練場に？」

驚いて河合は訳き返した。

「観光の案内をしてくれると聞いていた」

「それは、トレーニングが終わってからだ」

答えて、ポールは煙草を灰皿につきたてた。銀色のバンが警備員の制止を無視して、河合とポールの前まで走ってくるのを停止した。

スライドドアを開け、ポールは首を倒した。

「乗れ。明日の朝は七時にお前をピックアップしなけりゃならん」

バンはモノレールの走る、バンコクの大通りをのろのろと進んだ。深夜でも交通渋滞が激しく、バイクがけたたましい排気音を轟かせて走り回っている。ライダーは皆、ゼッケンのような上っ

ばりを着け、うしろに人を乗せていた。

河合が訊ねると、あれはひとり用のタクシーバイクだとポールが説明した。

「バンコクにはB.T.Sと地下鉄が走っているが、タクシーを使う人間も多い。もっと金のある奴は、自分の運転手を雇う」

大通りの両側の歩道には、ほぼ切れ目なく屋台が並んでいて、食べものや衣服を売っている。台北と似ているが、より数が多い。台北では「夜市」と呼ばれるナイトマーケットは、地区を限定されていた。バンコクでは、どこにでもあるという印象だ。

約一時間ほどで、バンは裏通りに建つホテルに到着した。ポールがフロント係にタイ語でまくしたて、河合はバスポートのコピーとひきかえに部屋の鍵を受けとった。

「このホテルは観光客はほとんど使わない。使うのは、世界中の軍関係者だ」

ポールが低い声でいった。言葉通り、簡素なロビーの「ビジネス・センター」で備えつけのパソコンを扱っているのは、髪が短く、体つきのがつしりとした男たちばかりだ。ビジネスマンにしては、異様に太い腕や首をもっている。

「今は民間軍事請負会社と契約を結んでいる連中が多い。タイは、世界中のどこへ飛ぶにも近くて便利だからだ。それに金を払いさえすれば、軍の施設でのトレーニングが可能だ。何より、奴ら傭兵の好物がそろっている」

「好物？」

ポールは片目をつぶった。

「女だよ。戦つていない兵隊の頭の中に、他に何があるというんだ。奴らはドラッグはやらない。ハードリカーもあまり飲まない。タイにはうまいビールと若くてかわいい女がごまんという。そ

れで充分なんだ」

ホテルの部屋は、日本のビジネスホテルよりは広く、清潔だった。テレビをつけると、タイ語のチャンネルの他に、中国語のチャンネルもあり、河合はそれをしばらく眺めた。

台湾での一年間で、自分は大きく変わった。それをひと言でいうなら、「どこにも所属していない状態」に慣れた、ということだろう。

警察も軍隊と同じく、巨大な組織だ。警官でいる限り、所属と任務が頭を離れることはない。それは制約であると同時に、帰属意識による精神の安定をもたらす。判断は上にゆだね、命令によつてのみ行動を決定する生活は、心に迷いを生まない。

それを壊したのがコワリヨフだ。警官であつても、一個人として命を狙われる。警察という組織の保護を得られないとわかったとき、河合の人生観はかわった。

「警察は助けてくれないよ」

ひとりの中国人に投げつけられた言葉が脳裡に浮かんだ。

胡という名の、黒龍江省出身の中国人だった。池袋でマッサージ店を経営するかたわら、裏で中国から引いた覚せい剤を、地元の暴力団に卸していた。が、代金をめぐるトラブルが起こり、そこに別の広域暴力団が割りこんだ。物を今後自分たちに卸すなら、地元の組から代金を回収してやる、とささやいたのだ。胡は悩んだあげく、取引に応じた。

代金を回収できなければ、次の品を中国からとり寄せられない。だがこれまでのつきあいを反故にしたら、地元の組の怒りを買うのは見えている。

切羽詰まったあげくの決断だった。広域暴力団は、力にものをいわせ、代金を地元の組から回収した。が、その金が胡のもとに届けられることはなかった。金が欲しければ、物をもってこい、

というのが広域暴力団の要求だった。だが回収金もなしで、新しい物を手に入れられる筈がない。胡は手下とともに、広域暴力団の人間を襲った。利用されたことに気づいたのだ。ひとりを射殺し、ふたりに重傷を負わせた。

その時点で動いたのが、河合ら組対二課だった。広域暴力団による報復とのタイムレースとなった。胡の手下ふたりが殺され、胡がからくも逃げのびたところを逮捕した。

法の上での責任はともかく、胡の怒りはもつともだった。あくどいのは、広域暴力団の側だ。取調べの席で、胡がいった言葉が、

「警察は守ってくれないよ」
だった。

河合ら警察官は、相手が広域暴力団であっても捜査をおこない、幹部に手錠を打つことができる。そのことで警官が報復をうける可能性は低い。それは、警察という組織すべてが、報復をうけて立つという前提に立っているからだ。万一、暴力団が警官に報復を企てれば、その暴力団は、徹底して警察の攻撃にさらされる覚悟が必要となる。

警察は、警官は守っても、それ以外の人間を守りきることができない。なぜなら、警官はその身分によって、未然に守られている。しかし一般の市民はちがう。たとえば暴力団の恨みを買ひ、狙われたら、被害がでるまで、警察が動くことはまれだ。怪我人や死者がでてから、実行犯を逮捕したとしても、それは決して守ったことにはならない。

「暴力団をおそれない」という標語があるが、警察に帰属する人間だから、いえる言葉だ。指一本さされる不安がないからこそいえるのだ。それを、河合ら警察官は、頭では理解しているが、立場として肌で感じることはなかった。帰属意識が、常に「守られている」立場にあるとささや

いていたからだ。

胡は服役中に殺された。皮肉なことに殺害したのは広域暴力団ではなく、取引を打ち切られた地元の組の構成員だった。が、実行するようにそのかしたのが、同じ房の広域暴力団員であったことが、後に判明した。

胡の言葉は正しかった。罪をつぐなうための服役中ですら、警察は胡を守ってやることができなかつた。

それからすでに何年かがたっている。時代はあきらかにかわった。警察は、そこに帰属する警官を守れなくなっている。

警官に対する攻撃を、警察がうけて立つという意識に変化はない。かつてはその意識が充分、「梶」になり、個々の警官を守っていた。警官に攻撃を加えようと考える人間は、そのあとの逃げ場を失うことで、犯行を思いとどまったからだ。暴力団員であれば、組にも警察からの反撃が及ぶ。

が、外国人犯罪者にそのルールはあてはまらない。たとえ警官を殺しても、国外に逃亡すれば、それで終わりだ。そして暴力団もそこに気づいた。

組員が警官を殺せば、組は破滅する。だが外国人の下請けにやらせれば、組は傷つかない。

結果、組対に所属する刑事の個人情報や暴力団がかき集めるようになった。住所、電話番号、家族構成、ローンの残高。もともとこうした個人情報を集めるのが朝飯前の組織なのだ。

もはや、警官すら、警察は守れなくなった。

警察が守ってくれないから、自分は警官を辞めたのだろうか。

自問自答することが、河合はあった。

それは半分あたっている。警察は、犯罪組織に対し、最強、最大の組織だと信じていた。最大であることは、今もかわらない。だが、最強か、と考えたとき、疑問が湧く。コワリヨフを追いつめられない警察は最強とはいえない。目の前のハエを追うことしかできない警察は最強にはなれない。

そこに北平が現われた。警察の限界を越えて犯罪組織に打撃を与えられる「ブラックチェンバー」という組織が存在することを知らせた。

自分の身を守るため、そしてより深く、奥へと犯罪組織を追いつめるため、河合は「ブラックチェンバー」に身を投じたのだ。

戦うこと以外に存在理由を見いだせなくなった兵士は、軍隊を辞めたあと、民間軍事請負会社に身を投じる。なぜなら戦闘の経験と能力を活かせる職場は、平和な地にはないからだ。

捜査すること以外、自分に存在理由はない。特に離婚してからは、河合はそう考えてきた。

優れた刑事かもしれないが、人間的な魅力はきつとカケラもない。それが証拠に、離婚後は恋愛には無縁だし、趣味と呼べるものもなかった。同僚からも、つきあいづらい奴だと思われていた筈だ。

そんな河合にとつて「ブラックチェンバー」は、ぴったりの世界だった。台北での一年をつらいとは感じてても、逃げだしたいと思わなかったのは、だからだ。

空っぽでいいのだ。捜査をしていないときの自分は。

空っぽの自分に、訓練がさまざまな技術を詰めこんでいく。それをまた捜査の現場で活かす。自分は技術の容れものと同じだ。

訓練が終わったとき、北平がどんな捜査を命じるのか、河合は期待と不安の両方を感じている。

警官だったときは、歯車のひとつでしかなかった。情報を収集するのが仕事で、判断は上司が下す。それに従ってガサをかけ、逮捕した。「ブラックチェンバー」では、異なる動きを求められるだろう。

そこに期待がある。

不安は——。実際、どんな事件をやらされるか、ということだ。事件として水面上に現われたものを、「ブラックチェンバー」はおそらく扱わない。「事件」とは、発覚した犯罪を示す言葉だ。殺人であれ、詐欺であれ、発覚しなければ「事件」ではない。

水面下で進行中の犯罪に、「ブラックチェンバー」はからんでいくのだ。

北平がいった言葉がよみがえる。

「強欲と正義は両立すると思うかね」

それは聞きようによつては、犯罪捜査を金儲けに利用しているともとれる。民間軍事請負会社が、戦争を金儲けに利用しているのと同じだ。

両立する筈だ。いや、させるべきだ。

河合は自答した。「ブラックチェンバー」がたとえ犯罪捜査を金儲けに利用しているとしても、警察にはおこなえない捜査を可能にするなら、今の自分はむしろそれをやりたい。

殺されかけたあの晩から、河合は、自分がもうかつてのような警察官ではいられなくなったことを実感していた。

組織は、自分を守れない。その一方で、やりたい仕事に制限をかけてくる。

仕事の制限だけならば、しかたのないことだとうけいれただろう。だが、死の危険から守られないのであれば、うけいれることに何の意味もない。

自分の身は、自分で守る。北平がいったように、そのための最大の防禦法が、「ブラックチェンバー」への参加なのだ。

たとえ技術の容れものに過ぎないにしても、俺は命が惜しい。

河合はつぶやく。機械ではない証だ。

河合には希望があった。「ブラックチェンバー」で働くようになれば、より、機械から人間に近づけるのではないか。少なくとも、部品であった警官の時代よりは、機械本体としての行動を許されるのではないか。

実は、それこそが自分が最も強く望んでいることかもしれない。

5

「グロックを撃つたことはあるか」

翌朝、迎えに現われたポールに河合が連れていかれたのは、明らかに軍の基地とわかる、高い塀で周囲を囲われた広大な施設だった。ゲートの前には、武装した歩哨が立っている。

ポールが助手席から合図を送るだけで、歩哨は敬礼し、ゲートを開いた。バンは基地の中をゆっくり走り、ひとつの建物の前で止まった。

ポールは大きく黒いナイロンのトレーニングバッグを手に、バンを降りた。半屋外式の射撃訓練場だった。仕切りのある、腰の高さほどのカウンタールが設けられ、その二十五メートルほど前方に土囊どのおうが積みあげられている。手前には、標的紙を固定する木枠が立っていた。

カウンタールにおいてナイロンバッグのファスナーをポールは開いた。プラスチック製のガン

キャリアケースをとりだし、蓋を開く。

名前は知っていたが、初めて見る拳銃だった。妙に角ばっていて、光沢がなく、プラスチックのオモチャのようだ。

ポールはケースからグロックをつかみあげると、マガジンを抜き、スライドを引いて、銃が空であることをまず調べた。安全確認の第一だ。

「ない。撃つたことがあるのは、三十八口径のリボルバーだけだ」

射撃場には、係員らしい、迷彩パンツの兵士がふたりいるだけだ。無関心げに新聞を読んでいる。

ポールは頷いた。紙箱をガンキャリアケースの横におく。九ミリ口径弾が五十発入っている。

それをふた箱、み箱と重ねていき、計十箱を並べた。

五百発。

河合はそれを見つめた。これまで撃つたすべての実弾の総量をはるかに超えている。

「グロックは、世界中の警察、軍隊、警備員で、現在、最も多く採用されている拳銃だ。その理由は何だと思っ？」

「命中率か」

ポールは首をふった。

「命中率は確かに悪くない。だが、競技会で一番多く使われているのは、コルトのM1911の改造バージョンだ。命中率だけを求めるなら、使用者は、もっと好みを優先する。もってみろ」さしだされた拳銃を河合は受けとった。そして驚いた。信じられないほど軽い。制服巡査時代に腰に吊るしていたニューナンブよりも軽かった。

「軽い」

ポールはにやりと笑った。

「まさにそこだ。一日中、もち歩くことを考えれば、軽さは何よりのメリットだ。このグロックの重量は六百二十グラム、アメリカ軍のベレッタは九百七十五グラム。一・五倍の重さだ。同じ九ミリ弾をダブルカラムマガジンに十七発詰めることを考えると、グロックを選ぶ理由がわかるだろう」

河合は頷いた。ニューナンプでも、三十八口径弾を五発詰めれば七百グラムを超える。それを一日中吊るしていれば、腰に負担がかかるのだ。ベレッタなら一キロを超えるだろう。

「軽い銃は性能が悪い、と聞いたことがある」

銃本体を軽量化することは、合金やプラスチックを素材にすればいくらかでも可能だ。だが軽い銃は、反動を吸収しないため、かえって扱いにくいと河合は聞いたことがあった。

「それはこのグロックが登場するまでだ」

ポールはいつて、背後の兵士をふりかえった。タイ語で指示を与える。のっそりと立ちあがった兵士が、射場に入り、紙の標的をホチキスで木枠に留めた。

もうひとりの兵士が、すえつけられた大型扇風機のスイッチを入れた。暑さを逃れるためだけではない。銃の発射は、油やスス、弾丸の鉛のカスをあたりにまき散らす。それを吸いこまないためだ。

その兵士が無言でガラス壘をさしだした。脱脂綿の玉が入っている。河合が怪訝そうに見返すと、耳の穴を指さした。

イアプロテクターのかわりらしい。確かにこの暑さでは、耳のすべてをおおうイアプロテクター

はむれる。

河合は耳栓を詰めた。その間にポールはグロックのマガジンに九ミリ弾を詰めていた。

「見てろ」

自らも耳栓を詰め、ポールはグロックをかまえた。河合が警察学校で習った射撃姿勢とはまるで異なるかまえた。

警察学校で習うのは、右腕一本をまっすぐのぼした型だ。体は自然、横向きになる。

ポールは両手でグロックをホールドし、肘を両方とも曲げ、下から支えるような姿勢で、標的に正対していた。

いきなり尖った銃声が耳に刺さった。ニューナンプの三十八口径とはちがい、どこか甲高い銃声だ。

標的紙の中心の黒点に穴が開いた。つづけて四発がそこに撃ちこまれた。すべてが中心点で、ほぼ一カ所に固まっている。

河合は目をみひらいた。警察における「射撃上級」のレベルではない。競技会のトップクラスだった。

五発を撃つと、グロックは沈黙した。ポールは銃をおろした。

「射撃は集中力と感性だ」

「集中力はわかる。だが感性とは何だ」

河合は訊ねた。ポールは無表情に答えた。

「紙のターゲットは撃ち返してこない。だからじっくりと狙える。だが相手も銃を手にかけていたら、そんな余裕はない。命中させるのは、感性だ」

河合は息を吐いた。その通りかもしれない。狙いをつけるという意識をもつことなく、標的に命中させるには、何か動物的な勘のようなものが必要になるのだろう。

「感性は、銃に慣れることでしか生まれえない。さっ、撃ってみろ」

ポールはグロックをさしだした。

6

三日間、昼間を射撃場で河合はすごした。銃がトラブルを起こしたときの処置も、ポールは河合に教えこんだ。

射撃訓練が終わると、食事をして夜の街に連れだされた。

コピー商品を売る屋台、東欧系の白人娼婦ばかりがいるディスコ、まだ十代としか見ええないゴーゴーガールが客をひく、ゴーゴバー、薬物中毒者が売人と取引をする現場もさんざん見せられた。

多くの売人とポールは知り合いだった。呼び止め、商品を見せろ、と命じると彼らは素直に応じた。マリファナ、メタンフェタミンの錠剤、ヘロイン、阿片あへんチンキを染みこませたハシシ(大麻樹脂)、などだ。

「連中は取締られないのか」

カントリー風のバーで、そうした売人のひとりが商品を見せ、立ち去ったあと、河合はポールに訊ねた。

「取締られるさ。月々のアガリを納めなければな」

ポールは平然と答えた。

「警察に？」

ポールは無言で河合を見返した。返事はなかった。

「さて、今日で俺の観光案内は終わりだ。お前はよくがんばった。グロックに関しては、それなりの腕にはなった」

ポールはジョッキのビールをあおり、手をさしだした。河合は複雑な気持でそれを握った。

「あと二日、お前は自由行動を楽しめる。女と楽しむのも、クスリをやるのも、プールで泳ぐのも、お前の勝手だ」

「二日たったらどうなるんだ」

「俺がホテルからお前を空港に連れていく。そこからどこに飛ばされるか、俺は知らない」

河合は頷いた。自分は北平の決めたスケジュールのまま動かされているようだ。

「ここからホテルへは歩いて帰れる。表通りにでて、BTS沿いに二ブロックいき、右に曲がればいい」

ポールは立ちあがり、いった。

「そうだ、こいつを渡しておく」

封筒をポールはとりだした。手にした瞬間、紙幣だとわかった。ポールは片目をつぶった。

「お楽しみには金がいるからな」

「ありがとう」

「礼はお前のボスにいえ。じゃあな」

バーをでていった。